



清水町内の養鶏場で消毒に当たる作業員（20日午前）

## 国の指針から8時間遅れ

国の指針では、感染確定から原則24時間以内の殺処分と72時間以内の埋却の目安を示している。道はこの時間内を目指したが、殺処分に70.5時間、埋却に80.5時間を要した。

20日午前までに、発生農場周辺の養鶏場などから異常の報告はない。

鶏舎内の消毒作業が終わって防疫措置が完了後、10日たって3キロ圏（移動制限区域）の農場でウイルスの検出がなければ、搬出制限（3～10キロ）を解除できる。また農場の防疫措置完了から21日たつと、3キロ圏内の防疫措置が解除される。解除の時期は、早ければ来年1月上・中旬の見通し。

## 清水・鳥インフル 初動に遅れ 指揮混乱

2016年12月21日

清水町内の養鶏場で発生した高病原性鳥インフルエンザは、防疫の山場となる殺処分と埋却を終え、消毒の段階に移っている。道内で初めて家きん（家畜の鳥）が感染した今回、他農場への感染は出ていないが、初動の遅れや情報の錯綜（さくそう）など課題や教訓も残した。専門家からは道独自の防疫計画の必要性を訴える声も出ている。

### 専門家「独自の防疫計画を」

「殺処分は“始まってから”原則24時間、埋却は72時間に終えたい」。高病原性鳥インフルへの感染が判明し、17日午前0時から十勝合同庁舎で開かれた記者会見。十勝家畜保健衛生所と十勝総合振興局の担当者からは、国の指針が示す「確定後24時間、72時間」とは違った説明があった。

説明の訂正はなく、翌午前10時の作業開始を発表。現場の清水町は16日深夜の防疫開始に備えていただけに肩すかしをくらった形。初動遅れは始まっていた。

17日午前10時の殺処分開始と周辺道路の消毒ポイント設置も、資材到着や搬入が遅れ、どちらも正午スタートに。感染確定からすでに13時間半がたっていた。

道内初の家きん農場での発生。農場は管内最大規模で殺処分の対象は21万羽。作業に慣れるのに時間がかかり、厳しい寒さに苦しんだ。処分対象は最終的に28万羽に膨らみ、鶏舎ごとに違う対応にも迫られた。

道農政部は「他県の例を参考に体制を組んだが、寒さが予想をはるかに超えた」とするが、誤算があったとはいえ、初動の遅れが最後まで響いた。

作業関係者は「指揮系統が混乱していた」と指摘。応援の職員が指示待ちで町体育館で数時間待機したり、車両の手配が二重になったりしたといい、清水町建設業協会は「お粗末な対応だった」と批判。同町幹部は「道の指示が一本化されず、現場にうまく伝わってなかった」と語る。

道農政部は「今回は失敗事例を含めていろいろある。しっかり検証したい」とした。

京都産業大学鳥インフルエンザ研究センターの大槻公

一センター長（獣医微生物学）は殺処分、埋却までの時間について「可及的速やかにという目安。金科玉条ではない」と一定の理解を示す。その上で「国の指針は全国の最大公約数。寒さ、積雪を考えた道内ならではの計画を作ることが重要だ」と話している。

### 人海戦術「不慣れ」「分担」課題

清水町の鳥インフルエンザは埋却処分までに国の指針



道畜産振興課  
家畜衛生担当  
西 英機 課長

より時間を要した。十勝では毎年、鳥インフルエンザや口蹄（こうてい）疫に備えて訓練をしてきたが、「本番」では作業が遅れた。道の家畜防疫の司令塔役で、畜産振興課の西英機家畜衛生担当課長（前十勝家畜保健衛生所長）は、訓練未経験者の作業誘導や季節の対応を課題に挙げる。

国は確定後24時間以内に殺処分、72時間以内に埋却を終えるよう指針を出している。宮崎県で2010年に発生した口蹄疫では、国の指針を超過、終息に時間がかかり問題となった。

今回、清水町では埋却完了までに80時間半かかり、「何百人と現地に送り込んだが、農務系の職員だけでなく、農場に行ったことがないような人を動かすことは難しかった」と話す。

西課長は11年から14年まで十勝家畜保健衛生所長を務め、11年には音更町内の家畜共進会場（アグリアリーナ）で口蹄疫発生を想定した実地・体験型の訓練を行った。この取り組みで農林水産省消費・安全局長賞を受賞